

ほなる、琉球をうるまの島と云と也、

〔琉球入貢紀略〕うるまの島琉球にあらざるの辨

笈埃隨筆、夏山雜談等に、うるまの國とは琉球なりといへり、これはもと狹衣といふ冊子に、うるまの島といふことのあるを、紹巴の下紐といふ註釋に、琉球なりといへるによると見ゆれども、謬りなり、うるまは新羅今の朝鮮の屬島にして、琉球にはあらず、自ら別なり、その證は大納言公任集に、しらぎのうるまの島人來りて、こゝの人のいふことも聞しらすときかせたまひて、返りごと聞えざりける人にと、詞書ありて、おぼつかなうるまの島の人なれやわが恨むるをしらすかほなる千載集には、四の句をわがこゝのにはなにする、また本朝麗藻に、新羅國遼陵島人も見えたり、これにて琉球ならざることいと分明なり、前田夏蔭云、うるまは遼陵の韓音なりといへり、

〔萬國夢物語上〕琉球國ナリ、○中日本ノ西南海中ニ在、王城ノ門ニ龍宮城ト云額ヲアゲタリ、古昔ヨリ日本ニテ龍宮ト云ハ、此國ヲカタドルナラン、

〔日本書紀通證七〕古事記曰、如魚鱗所造之宮室、楚辭魚鱗屋、号龍堂、今按此擬水府而言、故口訣纂疏等直爲龍宮也、古事記曰、稻水命者爲妣國而入坐海原也、姓氏錄曰、新良貴、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、男稻飯命之後也、是出於新良國主、鑑真和尚傳曰、或漂日南國、或赴龍宮、琉球神道記曰、琉球王門勝記龍宮城、

〔古事記傳十七〕海神の宮は、海の底にある國なり、後世のなまさかしき説どもは、古傳の趣にかなはず、佛書に龍宮と云る物あり、其説るさま、あやしきまで此段にいとよく似たる處あり、中略さて又近き代のなまさかしき人の心には、水中に宮室などのおくべき理なしと思ひとるから、かの龍宮などの説をも信ず、此段の事も、實は海底には非ずとして、或は薩摩國近き一の島なりと、或は琉球國なりといひ、或は對馬なりなども云て、其証なども薩摩國傳に背ける例の儒者意の私事なり、

〔中山聘使略〕通信 貢使